

*Christine de Pizan (1365-1431ca) dall'Italia alla Francia fino al Giappone*

Tokio, Istituto italiano di cultura - 1 novembre 2010

クリスティーヌ・ド・ピザン

イタリアからフランス、そして日本へ

於 イタリア文化会館 東京 2010 年 11 月 1 日

マリア・ジュゼッピーナ・ムツァレツリ

(山崎彩訳)



11/1 講演会の模様(左がムツァレツリ氏、右は通訳の山崎彩氏)

私が最初にクリスティーヌにかかわることになったのは、20 年ほど前、ユートピアに関する国際会議がレッチェで行われたときでした(図 1)。私は「女の都」について講演することを提案しました(図 2)。「女の都」は 15 世紀初めにクリスティーヌ・ド・ピザンが考案したユートピア的な場所であり、徳と知識と勇気のある女性たちの避難場所として創りあげられたものです。当時、こういった徳の高い女性たちは、他の女性たちに比べれば不利な扱いを受けたり、偏見の目で見られることは少なかったのですが、それでも限定的な評価しか与えられていませんでした。私がその論文を書いていたとき、図書館に所蔵されていた『女の都』*Le Livre de la Cité des Dames* のコピーは常に貸し出し中でした。後になって知ったのですが、ちょうどその頃、同僚のパトリツィア・カラッフィがこの本の翻訳をしているところだったのです。翻訳は 1997 年に出版され、クリスティーヌの初のイタリア語訳作品となりました。10 年後、ビアンカ・ガラヴェッリによって、『平和の書』*Libro della Pace* と『ジャンヌ・ダルク讃歌』*Dedicato a Giovanna d'Arco* がイタリア語訳されました。そして、今、私の弟子であるヴィルジニア・ロッシーニの翻訳で、シャルル 5 世の伝記が出版されようとしています。すなわち、イタリアでクリスティーヌに関する研究が本格的に行われるようになって、まだ 20 年しか経っておらず、また、これまでにイタリア語に訳された作品も 4 つしかないのです。イタリアにおけるクリスティーヌの知名度が意外に低いことに気づいた私は、彼女のすばらしい執筆活動と人生をまとめた本を書くことを決意し、本は 2007 年に出版されました。その本の日本語訳の出版は、私が今まで考えたことのなかったクリスティーヌの一側面について考える機会を与えてくれました。それは、仲介者としての役割です。

本日、私は、クリスティーヌとその作品について、この翻訳が象徴するような仲介、懸け橋という観点からお話したいと思います。私の本にすばらしい訳文を付けてくださっ

た伊藤亜紀先生、出版社の知泉書館、また、このプロジェクト実現のために尽力くださった、友人であり研究仲間でもある大黒俊二先生、山辺規子先生、さらに、イタリア文化会館と文化女子大学文化ファッション研究機構のご協力に感謝いたします。皆様の御助力を得て、クリスティーヌは、互いに異なる世界と環境を結びつけました。この場合には、クリスティーヌの生まれ故郷であるイタリア、そして日本が、フランスを経由して結びついたので（フランスでイタリア語名の「クリスティーナ」はフランス語読みの「クリスティーヌ」となりました）。

異なる世界を結び付けること、異なる世界の懸け橋となることは、クリスティーヌの生涯において中心となるテーマであったと私は思います。このことは、他に類を見ない彼女の物語を読み解く鍵ともなりえるでしょう。実際、クリスティーヌの数奇な人生を再構成するためにはさまざまなアプローチが可能でしょうが、そのすべての場合において浮かび上がるのは、彼女が時代を超えた存在であったと同時に、時代の文脈にもびたりと合う人物であったということです。クリスティーヌの人生における出来事は、私たちが中世に対して持つイメージを越えています、彼女は確かに実在の人物です。さらに、自分の作品を出版し、あの時代には不可能と見える役割を担うことに成功したのです。その役割の一つは、まさに、地理的に遠いだけではない、お互いに離れた世界や現実を結びつけることでした(図 3~6)<sup>1</sup>。

第一の例を挙げましょう。クリスティーヌはイタリアで生まれました。彼女は 1365 年にヴェネツィアで生まれ、幼年時代をボローニャで暮らしました。その後、家族と一緒にパリへ渡りました。彼女の父親は、さまざまな宮廷が競って招聘しようとした有名な占星学者・医者でしたが、パリでシャルル 5 世に仕えることになったのです。ここで指摘されるべきことは、私たちが「暗黒の」という枕詞を使い続けている中世において、知識人たちが移動していたということです。考えてみれば、この時代にはインターネットもなく、旅行には非常に多くの困難が伴っていたのですが、知識は循環し、世界は私たちが想像しているよりもずっと緊密に結びついていました。クリスティーヌの父親の名前は、トンマーズ・ダ・ピッツァーノといい、家族の出身地であるボローニャ付近のピッツァーノ村に由来しています(図 7)。この博識な父親が、イタリアとフランスの結びつき、個人的で文化的な結びつきのきっかけを作ったのです。クリスティーヌは自分がイタリアの出身であることを意識し、そこに絆を感じていました。彼女は自らを「イタリアの女性」と称していましたし、他の家族とともに「ロンバルディア風の服装」、つまり当時のイタリアで流行していた服装でパリの宮廷に到着しました。そして、これからさまざまな教養を身につける準備ができていました。

クリスティーヌの広範な学識は、ボローニャ大学で教えた父親のトンマーズから授けられたものですが、フランスでは父親やフランス王の図書室で読んだ本によっても知識を得ていました。女性であり、イタリア人であったクリスティーヌは、フランスの知識人世界において完全にアウトサイダーでした。イタリアを離れた後、公には「クリスティーヌ」と呼ばれるようになった彼女は、父親がしたのと同じように、異なる文化と異なる環境の橋渡し役、つまり、ボローニャ大学とフランス宮廷や文壇をつなぐ役割を担いました。

クリスティーヌは父親から与えられる知識を吸収し、覚えるのが速く、百年戦争、またブルゴーニュ派とアルマニャック派との内紛が続く非常に難しい時代のパリにおいて上手に立ち回る能力がありました。彼女の父親は、おそらく気まぐれから、しかし、これは時代を先取りしたかたちで（ルネサンスの女性中心主義 *protagonismo femmineo* は、女性に対

<sup>1</sup>ここで 2009 年にイタリアで公開されたクリスティーヌの伝記映画「クリスティーヌ／クリスティーナ」(監督: ステファニア・サンドレリ)、および映画で着用された衣裳の展覧会(2009 年末にボローニャ市立中世博物館で開催)の様子が一部紹介された。

する教育が家庭で行われたことによって可能となったのです）、自分の娘を自宅のアカデミアにおいて教育しました。クリスティーヌが 15 歳になった時に、父親は彼女をピカルディの貴族と結婚させます。つまり、父親は、彼女を修道女にしたかったわけでもなく、また、この時代の少女たちとは異なる「知識を持った」自分の娘が、他の娘たちとは異なる人生を送る「不適合者」となることも望んでいませんでした。結婚によって、クリスティーヌはその時代と環境の伝統的な規範の中に引き戻されました。これは、母親も強く望んでいたことでした。クリスティーヌの夫は、王の書記官で秘書官でもありました。彼女は夫からも多くのことを学び、さまざまな世界と知識を結び付けるという作業を続けて行くことになりました。

「運命・運 Fortuna」という言葉と概念は、クリスティーヌが自分の作品の中でしばしば用いるものですが、この Fortuna 運、あるいは Sfortuna 不運のために、彼女は寄辺のない身の上になってしまいます。シャルル 5 世はクリスティーヌの一家の庇護者でしたが、1380 年に亡くなり、まもなく父親と夫も相次いで亡くなりました。彼女は 25 歳にして、庇護者も、生き抜く手段もないままに、非常に難しい世界に取り残されました。若い寡婦で、既に死んでしまった王に仕えていたことのある外国人の学者の娘であったクリスティーヌに、世間は優しくありませんでした。彼女は非常に弱い立場にあったと言えます。彼女は、自分の役割、そして何よりも自分の仕事を創り出さなければならず、そのために数年間を費やしました。その役割とは、在俗の職業人としての知識人というものでした。

そこで、クリスティーヌはバラードを創作し始めます（もっとも有名なものは自らの孤独について書かれています）(図 8)。これらの詩は宮廷人たちに好まれ、彼女と宮廷とのつながりは強まりました。それによって、宮廷から恩恵を受け、金銭を稼ぐことができるようになりました。宮廷人の中には、精巧に作られた高価な装飾写本 *libri miniati* を愛好する人たちがいて、クリスティーヌは、異なる環境をつなぐという彼女の責務を果たしながら、自分の本を書くばかりではなく、自分で装飾写本を作らせます(図 9)。写本作りは、おそらく書記官の夫が教えたことがあったのでしょう。彼女は「スクリプトリウム」と呼ばれた工房で写本を作らせましたが、そこには写字と挿絵＝「イルミナツィオーネ」を専門とする数人の「助手」たちが働いていました。この工房からは非常に美しい本が生まれ、例えば、ベリー公ジャンといった人から高く評価され、非常に高価な代価で売られることになりました(図 10)。クリスティーヌはブルゴーニュ家からも、オルレアン家からも仕事を得ることができました。クリスティーヌは、この場合においてもまた、激しく敵対している二つのグループをつなぐ役割、あるいは、おそらくはこのグループの間をジグザグに縫う役割を担い、その非凡な才能によって成功を獲得しました。そのために、シャルル 5 世の弟であるブルゴーニュ公フィリップが、亡くなった王の伝記の執筆を依頼したほどでした(図 11)。王の伝記の執筆は非常に重要な仕事であり、現在でもなぜこれほどの仕事が一人の女性に託され得たのか、私は説明することができません。1404 年の 1 月 1 日にクリスティーヌから『運命の変転の書』*Mutacion de Fortune* を贈られたフィリップが、この作品を高く評価したことは明らかです。そして、彼はシャルル 5 世の記憶を留める書き手として彼女を選んだのです(図 12)。フィリップは彼女をルーヴル宮に呼び出し、何をどのようにして書くべきかという指示を与えました。クリスティーヌはこの仕事を受け、初の女性歴史家となりました。とはいえ、クリスティーヌが執筆したものはほとんどすべて、彼女が作品を書いたさまざまな分野において女性が初めて書くものでしたから、事実上は、クリスティーヌの著作はすべて女性初という記録を持っていました。

クリスティーヌは一年足らずで伝記を書きあげますが、同時に『女の都』にも着手します(図 13)。この作品の設定はそれほど独創性に溢れたものではありません。それは、有名な女性たちの生涯を描いた伝記（「メダリオネ」）のシリーズでした。しかしその中に

は、非常に今日的な言葉を見出すことができます。ここではそのうちの一つだけを挙げることにしましょう。「もし、女の子たちを学校へ行かせて、男の子たちと同様に彼女たちにも学問を教えるという習慣があったなら、女の子たちは男の子たちと同様に全ての学問をすみずみまで学びとり、理解するでしょう。」クリスティーヌは一つの場所、つまり「女性たちの都」を考案しました。そこは、多くの女性たち、実在の人物のほかにも、神話の世界、あるいは聖書の中の登場人物たちが出会い、また当時のミソジニー（女性嫌い）から身を守って共に暮らす町です。このアイディアは、『薔薇物語』についての論争への参加の後に生まれたものでした。この有名な韻文作品は、第一部が 1245 年頃にギヨーム・ド・ロリスによって書かれ、13 世紀の終わりになって第二部がジャン・ド・マンによって書かれましたが、特に第二部は、女性に対する不当な言及を含んでいます。そこでの女性は軽蔑の対象であり、男性の本能を満足させるための道具とされるのです。クリスティーヌは反旗を翻し、王妃イザボー・ド・バヴィエールにこの議論に参加するようにと願い出ました(図 14)。女性たちは、弱弱しいとか、人を欺くとか、嘘つきなどと、十把一絡げに偏見を持たれていましたが、その女性たち自身からの物の見方を世に知らしめるためでした。

このようにして、男性の世界と女性の世界を結び付けるためにクリスティーヌが果たした重要な役割が明らかになります。このときまで、女性の世界は、ほとんどまったく声を持たず、そのために女性一般に差し向けられた非難に反論することもできませんでした。クリスティーヌは、議論において受け入れられやすい論法と主張を選ぶようにし、侮辱的な言い方を和らげるように気をつけ、また同時に、自らの才能と人格をたいしたものではないと思わせるようにしました。クリスティーヌは自らを、単純で無知、知性も知識もかんばしくない女性であると述べていました。そして、ジャン・ド・モントルイユに宛てた書簡の中で彼女は自分を「知性の乏しい、取るに足らぬ分別の女」とであると定義し、彼女の「女性ゆえの弱さ」を大目に見てほしいと頼みながらも、同時に、同時代の最も重要な知識人たちに反論し、男性たちの間で行うのと同じように女性たちをよく見極めるように、また女性一般の尊厳を認めるようにと促しています。おそらく、この「謙虚さ」は手段としてのみ用いられたものでしょうが、それは、特別な存在である彼女——これは、クリスティーヌ自身の明らかな才能に加えて、家庭で受けた教育から、物珍しい存在に興味を示した宮廷まで、さまざまな外的要因にも依るものでした——を、受け入れられ易くするのに役立ちました。『女の都』*Cité des Dames* と、続く『三つの徳の書、あるいは女の都の宝典』*Le Livre des Trois Vertus ou Le Trésor de la Cité des Dames* によって、クリスティーヌは仲介者としての仕事を続けました(図 15)。それはある種の対話、というより、教養ある男性たちと女性たち（女性といっても、実際のところはクリスティーヌだけでしたが）の「論争」でした。そこでは男性、女性の役割と特徴について議論が交わされました。ある議論に公式に女性が加わるというのは初めてのことでした。このような他に前例を見ない行動は、一種の作法書であった『女の都の宝典』において、さまざまな社会階級の女性たちに賢明さを促したことは一見したところ相容れないようにも見えます。これは、矛盾と言うよりはむしろ、彼女の政治的感覚、際立った現実的な見方、そして、自分の受けた教育に対する信頼を示しています。クリスティーヌは若者の教育にもエネルギーを注ぎました。ここでもまた、彼女は懸け橋としての役割を担います。今度は、終わることのないように見えた戦争に苦しむ自らの世代と、伝統的な価値観によって教育しようとした息子たち、孫たちの世代とをつなぐ役割です。これらの価値観とは、騎士道精神（クリスティーヌは騎士道について書いた最初にして唯一の女性です）から平和の概念（彼女の『平和の書』*La Livre de la Paix* は、平和をもたらす良い統治法を論じたものです）のことを指しています。

クリスティーヌは 30 以上の作品を執筆し、有名になります。イングランド王もミラノ公も同じように宮廷に招聘しようとしていました。その成功の大きな要因は、もちろん彼女のコミュニケーション能力によるものです。クリスティーヌは実際、紛争をしている人物の双方と関係を保っていました。また、女性の知識人という物珍しい存在であることを最も大きな武器としていました。女性の手で書かれたものであるという事実が、自分の作品を非凡なものにしていること、おそらくこの珍しさゆえに、作品が求められているのだということを、クリスティーヌはよく知っていました。そのために『クリスティーヌの夢の書』*Le Livre de l'avisio Cristine* においては以下のように書いています。「私の作品の気高さというより、それらの作品を一人の女性が書いたという尋常ならざる事実が、私の作品を広めることになりました。」このことが作品を成功に導いたのです。「このようにして上に述べた私の本は、短い期間の間にさまざまな土地、さまざまな国へ伝えられ、もたらされることになりました」。彼女は作者としての自分を強調するために、自分のイメージに対して賢い方法を取りました。作品の写本に常に自らの姿を描かせたのです。彼女は、あるときは仕事に集中して机に向かっている姿、あるときは、女の都の城壁をつくっている姿、あるときは三人の貴婦人（理性、公正、正義）の訪問を受けている姿で描かれています(図 16)。この三人の貴婦人はいろいろな作品を書くように彼女を促し、疲れていても仕事を続けるようにと励まします。クリスティーヌの存命中に、つまり、自分でコントロールできるうちに描かれた肖像はすべて同じ方法で描かれています。彼女はほっそりとした姿で、すぐに本人とわかる服を身につけています(図 17)。この服は「知識を使って働く労働者」、職業的な女流作家としてのイメージを定着させるものです。医者の娘であり、貴族である書記官の妻であったのですから、時代の規定に従えばもっと優雅で豪華な服を身につけることもできたでしょう。しかし彼女は一種の仕事着をつけた姿で自らを描かせました。それは、身体にぴったりとしたコバルト・ブルーの質素な上衣（それは、黒か、灰色と褪せた薔薇色の中間色のこともありました）で(図 18)、袖口が開いていて翼が垂れるような形をしていました(図 1、19、20)。彼女は夫を亡くした女性という立場を思い出させる黒い服を着ることを好みませんでした。また、宝石や毛皮を身につけることも望みませんでした(図 21)。クリスティーヌの目的は、自らの服を通してアイデンティティを補強することでした。その服装は、行き届いたものであると同時に、自己の本質をあらわし、彼女だとすぐに見分けられるものでなければなりません。私たちの「レディー・イン・ブルー」がおこなった、「青」という色の選択も、よく考えられたものでした(図 1、17、19、20)。この色は古くからの伝統はないものの、当時は非常に愛された色でした。初めは聖母像によく用いられていましたが、現実の世界においても流通しはじめました。さらに、この色は写本挿絵においてもよく見られるようになりました。今日、私たちの多くは、買った本やこれから読もうとする本の裏表紙に載っている著者の写真を見たいと思うでしょう。何世紀も前に、クリスティーヌもこのことに気づいたのです。そして自分の立場の特殊性を利用して、流通してすぐに伝わっていく自分の作品の中に、自分の姿を提示したのです。

自らの予想に反して、彼女は生きている間は有名でしたが、亡くなると忘れ去られていきました。彼女の平和への要請もまた、聞き入れられることはありませんでした。それどころか、戦争はパリに及び、クリスティーヌは恐ろしい暴力の中に居合わせる羽目に陥りました。そのため、彼女は町を離れる決意をし、娘の住んでいるポワシーにある修道院へ避難しました。修道女にはなりませんでしたが、沈黙の人となったのです。そして、教育という仕事も、懸け橋となることも辞めてしまいました。10 年以上も断筆していたのは、おそらく、落胆してのことでしょう。この時代に起きた劇的な出来事に打ちのめされていたことは確かです。

1429年、シャルル7世がついにフランスの王位に就いたということを、修道院にいたクリスティーヌは知りました。血にまみれた長い抗争の末に、ジャンヌ・ダルクの支援をうけてのことでした(図 22)。それは、奇跡の雰囲気彩られた歴史的事件でした。徳高い、勇敢な一人の女性、いや、一人の少女が事態を変えることに成功したのです。このことは、クリスティーヌがよく知りぬき、何度も書いたことの証明でもありました。つまり、女性たちにも徳の高さや勇敢さがあり、勲功を立てられるということです。これは、クリスティーヌの考えが正しかったことを明らかにするものであり、また、フランスとイングランドの間の激しい対立の幸福な結末でもありました。このようにして、クリスティーヌはペンを再び手にし、亡くなる前に、また、ジャンヌ・ダルクが火あぶりの刑に処されて悲劇的な最期を遂げたことを知る前に、このオルレアン家の乙女(ジャンヌ・ダルク)に捧げられた自身の最後の作品を書き上げました。

クリスティーヌの人生は、さまざまな意味で全く他に例のないものでした。彼女は、完全に昔(つまり、今から500年以上前)の女性でありながら、自分の時代と現代性とを結び付けました。そして、(今でも)異なる環境や人々をつなぐ懸け橋となってくれるのです(図 23)。伊藤亜紀先生の翻訳で、クリスティーヌは日本のみなさんにより多くのことを語ることができることでしょう。フランスでの人生についても、そして、個人的な、文化的な基盤であるイタリアについても語ってくれるでしょう。この翻訳によって、イタリアと日本の両国、そして大学をはじめとする関係機関がさらに近づくことになるでしょう。これは全て14世紀から15世紀に生きた一人の女性のおかげなのです。文化が男性至上主義であった時代に、クリスティーヌは在俗の女性の知識人として生きました。彼女は、フェミニストという言葉が存在する以前のフェミニストであり、コミュニケーション学や記号学といった講座が生まれる前に存在したコミュニケーションの達人でした。単純に言えば、クリスティーヌは、教養のある、思慮深い、頭の回転の速い女性だったのであり、このような性質を持っていたのは彼女だけではなかったでしょう。しかし、当時は、学校へ行ったり、本を執筆したり、歴史的な事件を論じたりするのは男性だけだったのです。クリスティーヌは、彼女の時代と私たちとの懸け橋となり、私たちが中世という世界を紋切り型で捉えないように導いてくれます。そして、現代の私たちがより謙虚で批判的な姿勢で自らのあり方を考え直し、将来の世代への責務と責任をより大胆なやり方で再検討するようにと促しているのです。





図1. 「執筆中のクリスティーヌ・ド・ピザン」(『百のバラード』、Harley ms. 4431, 4r.) ロンドン、大英図書館。



図2. 「〈公正〉は名婦たちに囲まれたクリスティーヌを迎え入れる」(『女の都』、ms. fr. 1178, f.64v.) パリ、フランス国立図書館。

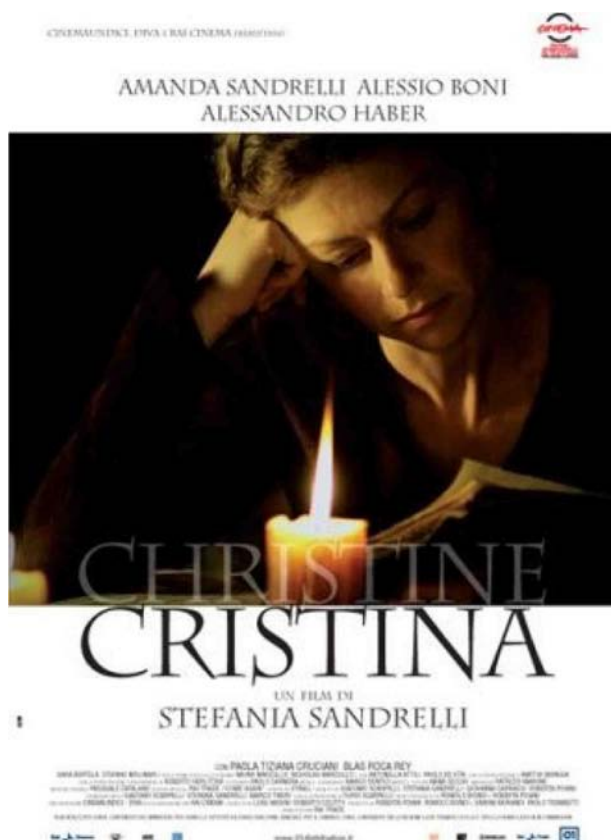


図 3. 映画「クリスティーヌ/クリスティーナ」(2009)のポスター



図 4. 映画「クリスティーヌ/クリスティーナ」(2009)の一場面





図 5. クリスティーヌ(アマンダ・サンドレリ・右)とジャン・ジェルソン(アレッシオ・ボーニ)



図 6. 映画「クリスティーヌ/クリスティーナ」で着用された衣裳の展覧会パンフレット



図 7. ピッツアーノ



図 8. 「執筆中のクリスティーヌ・ド・ピザン」(『百のバラード』、ms. fr. 835, 1r.)パリ、フランス国立図書館。





図 9. 「クリスティーヌと武装したミネルウァ」(『軍務と騎士道の書』、Harley ms. 4605, 3r.) ロンドン、大英図書館。



図 10. 「食卓につくベリー公」(ランブール兄弟『ベリー公のいとも豪華なる時禱書』1 月部分図)。



図 11. 《ブルゴーニュ公フィリップ豪胆公》16 世紀、ヴェルサイユ、国立美術館。



図 12. 左: 『シャルル 5 世の聖書』 1372 年、デン・ハーグ、国立美術館。

右: 《シャルル 5 世》1380 年頃、パリ、ルーヴル美術館。





図 13. 「女の都を建設するクリスティーヌと〈理性〉」(『女の都』、Harley ms. 4431, 290r.) ロンドン、大英図書館。



図 14. 「クリスティーヌは王妃イザボー・ド・バヴィエールに自作を献じる」(Harley ms. 4431, 3r.) ロンドン、大英図書館。





図 15. 「クリスティーヌは『女の都の宝典』をマルグリット・ド・ブルゴーニュに献じる」(ms. fr. 1177, 114r.)パリ、フランス国立図書館。



図 16. 左: 「〈理性〉〈公正〉〈正義〉が、執筆を再開するようにとクリスティーヌに催促する」  
右: 「壇上の〈賢明〉」(『女の都の宝典』、ms. fr. Med. 101, 1r.)ボストン、公立図書館。



図 17. 「クリスティーヌは息子に教訓を授ける」(『わが息子ジャン・ド・カステルに与える道徳的教訓』、Harley ms. 4431, 261v.) ロンドン、大英図書館。



図 18. 左: 「クリスティーヌはシャルル6世に『長き研鑽の道の書』を献じる」  
 右: 「クリスティーヌはルイ・ドルレアンに『オテアの手簡』を献じる」  
 (Harley ms. 4431, 178r., 95r.) ロンドン、大英図書館。





図 19. 「クリスティーヌと公爵」 (Harley ms. 4431, 143r.) ロンドン、大英図書館。



図 20. 左: 「〈理性〉〈公正〉〈正義〉がクリスティーヌの前にあらわれる」 (『女の都』、ms. fr. 607, 2r.) パリ、フランス国立図書館。



右: 「運命の間の壁画を眺めるクリスティーヌ」 (『運命の変転の書』、ms. fr. 603, 127v.) パリ、フランス国立図書館。



図 21. 15 世紀初頭のフランスにおける服装の例。

左: 「哲学の書を読むレオンティオンと恋人」 (ms. fr. 12420, 93r.) パリ、フランス国立図書館。

右: 「高いかぶりものをつけた女性たち」 (ms. 5089, 178r.) パリ、アルスナル図書館。



図 22. 《ジャンヌ・ダルク》 1485 年頃、パリ、フランス国立中央文書館。





図 23. 映画「クリスティーヌ/クリスティーナ」(2009)のポスター